

緑内障ってどんな病気

緑内障は、目の奥の視神経が障害を受けて視野が狭くなる病気の一つです。視神経が障害を受けて視野が狭くなる病気には、非常に多くの種類があり、緑内障と正確に診断するには、ほかの視神経の病気と区別しなくてはなりません。

過去には、眼圧が高く、特徴的な視神経の萎縮が見られるのが、緑内障と言われていましたが、現在では、眼圧が低い、あるいは正常の状態でも、特徴的な視神経萎縮と視野異常を示す例がたくさんあることが分かっています（正常眼圧緑内障と呼ばれている）。それでも眼圧は、緑内障進行の重要な因子であることに変わりありません。また眼圧は、一日の内での変動や季節性の変動などもあるので、何回か測定することが重要です。

専門家による緑内障の分類は数十種類以上あります。ここでは、代表的なものについて説明します。

急性原発性閉塞隅角緑内障（急性の緑内障）の症状は、眼のかすみ、眼の痛み、頭痛、吐き気、おう吐、虹視症（蛍光灯などの周りに虹が見える）などです。激しい急性の病気です。放置すると短時間で失明につながります。このような眼の症状があれば、眼科医にすぐみてもらいましょう。この発作を起こしやすい方は、ある程度予測でき、予防手段もありますので、近くの眼科医に相談してください。

また、原発性開放隅角緑内障や原発性閉塞隅角緑内障など、慢性の緑内障の症状は視野の異常で、気づいた時には、症状はかなり進行しています。診断された時には、自覚症状がほとんどない方が多いのです。視力が低下したのであれば、さらに症状が悪化しています。症状が出てからでは遅すぎます。一度は眼科医の診察を受けて緑内障があるかどうかみてもらいましょう。

平成14年7月
柏木 豊彦